

漂流紀

1991年7月2日、我々「関西大学タクラマカン砂漠縦断カヌー航行遠征隊」はようやく出発の日を迎えた。また、それは長かった準備期間がようやく過去のものになろうとする日でもあった。

期待と不安がいきりまじりながら、大阪空港を出発した我々は、最初の中国訪問地、上海に入った。上海から空路ウルムチに入り、そこで中国側協力隊員と合流。さらに、また空路でカシュガルへ、そこから陸路で今回の川下りの出発点、ヤルカンドに7月8日に到着した。ヤルカンドは17世紀に南新疆を統治したヤルカンド汗国の首都だったところ。現在では、人口40万人余の南疆地区第一の都市である。

タクラマカン砂漠とは、ウイグル語で「入れば出られない」の意。大洋から遠く、また、天山山脈やクンルン山脈といった高い山脈に囲まれているので、年間降水量は50mm以下。人が住めるようなところではない。これら山脈から流れ出る雪解け水が多く、多くの川を形成している。タリム川もそうした河川のひとつ。新疆の多くの都市はこうした河川の恩恵の下に発達したオアシス都市でヤルカンドもそのひとつである。

車で出発地点のヤルカンド大橋へ偵察に出かけると、この年のヤルカンド川は89年の偵察の時よりもかなり水量が多い。中国側協力隊員の王星さんの話では、6月上旬に上流で大雨が降って、水量が増加しているとのこと。河川敷の幅は約500m、川筋は3～5本に分流し、見た目ではかなり流れが速そうだ。

7月9日の朝、山田以下3名と中国側協力隊員の2名はカナディアン・カヌー3艇に分乗して出発、補給隊にまわる唯一の女性隊員佐藤と他の中国側協力隊員3名は車で最初の補給地点、メゲチへ先行した。

今回の川下りは全行程1,680km、その間激流と呼べるような難所はほとんどないことから、推進力があり、かつ食糧や野営装備が積めるカナディアン・カヌーを選択した。また、途中300kmは水が伏流してしまい河床が干上がっている、その区間は歩かなければならないことから、木のカヌーではなく折り畳むことができるカヌーの方が輸送には好都合だ。試行錯誤の末、オーストリア製のグラブナー・アウトサイド（全長約5m）を使用することに



ヤルカンド大橋下流にて

した。素材はゴムで、ラフトのようにいくつか気室を持っている。これなら輸送の際、気室の中の空気を抜けばすぐに折り畳むことができる。

出発直後のヤルカンド川は思っていた通り、流れはかなり速い。水の色は砂をたっぷり含んでいるので、コーヒー色に濁っている。そのため、水深を判別することができず、カヌーを浅瀬に乗り上げてしまうことがたびたびあった。そのような時はカヌーから降りて、引きずっていくことになるのだが、足が泥にめりこんで歩くのに苦勞する。河岸はポプラが林立し、ウイグル人が農作業や羊などの放牧をしている姿が目についた。岸辺で休憩していると我々が珍しいのか、ウイグル人達が寄ってくる。場合によれば、黒山の人だかりになることもある。彼らは私達の持っている装備全てに興味を示し、手にとって触る。特にライフジャケットに興味を示し、大人も子供も順番に着ては川に飛び込んでしゃぎまわる。そして、カメラを向けると人なつっこい笑顔を見せる。彼らは純粋に陽気な民族だ。

7月11日、メゲチに到着。ここで地元公安局と河川航行許可に関してトラブルが発生。一時はカシュガルまで戻らざるを得ない状況にもなったが、4日後、ようやく次の目的地、小海子ダムに向けて航行を再開。補給隊は佐藤から山本に交替して、同じように車で先行する。

下るにつれて河川敷の幅は徐々に狭くなり、川筋は1本になる。水が砂に吸いこまれてゆくからだろうか。とはいえ、増水のおかげで1日の平均航行距離は予定の30kmを10kmも上回る40km。時速にすれば8kmのペースで進む。

このころから川の状態にも慣れ、川旅生活にもリズムがでてきた。朝8時半に起きて、10時に出発。1時間漕ぐごとに10分ほど休憩する。2時ごろカヌーの上で昼食を食べ、16~17時まで航行、テント設営後1時間ほど昼寝をして、20時ごろ夕食、0時ごろ就寝という毎日となった。中国は広い国土にもかかわらず、全ての地域で北京時間を採用しているので新疆での夜明けは8時ごろ、日没は23~0時ごろになる。そのため、このような変則的な行動時間割りになる。

食事は昼食以外、中華料理。特に夕食は本格的な本場の中華料理で、3~4品は出る。主に中国側協力隊員の王勇さんが作る。水は始めのうち日本から持ってきた浄水器に川の水を通して作っ



遊びにやって来たウイグル人たち



メゲチ下流を航行中



48団場の渡し場

ていたが、時間がかかる上にかなりの労力を要するので、途中から使うのをやめた。そのかわりに、砂洲に溜っている割合きれいな水を沸騰させ殺菌処理をしてから使用した。またきれいな水がない時は、大きな容器に川の水を入れて砂を沈殿させてから、同じような処理を施してから使用した。

大陸性の気候の新疆では1日の気温差が激しい。日中の気温は40度を超える。湿度は低く非常に乾燥しているので汗はあまりかかないが、やはり肉体的な疲労は大きい。前述の時間割りの中に昼寝を入れているのはそのためだ。地平線に真っ赤な太陽が沈むころ、ようやく気温が下がりだして涼しくなる。夜明けごろが最も気温が低く10～15度ぐらい。シャツ1枚ではブルブル震えてしまう。

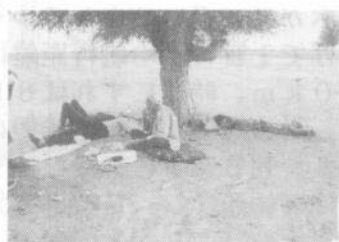
7月20日、小海子ダムに到着。出迎えた山本が言うには、ここから阿克苏川との合流点まで水は流れていないらしい。最大の難所がやってきた。そこでここから歩行することにしたが、このあたりにはラクダも馬もない。仕方なく3団場という町まで車で移動、ラクダなり馬なりを調達して歩行することにする。しかし、結局調達できたのは馬車1台だけで、積載できる食糧や水の量はおのずと限界がある。そこで、人数を私達日本側は山田、山本の2名と中国側協力隊員の2名、それと馬方兼ガイドのウイグル人1名、計5名のみとし、三浦、土山、佐藤の3名と他の中国側協力隊員3名は補給隊に回ってもらうことにした。

7月23日、馬車に全ての荷物を積み込んで歩行を開始。ワジ沿いの道135kmを進む。日中の気温は40度以上。降りそそぐ太陽の紫外線に痛さを感じる。また水の上とは違い、わき上がる地熱を感じる。疲労感、川の上とは雲泥の差だ。昼食後1時間の太休止では、木陰で死んだように眠る。

3日目、昨日通過したはずの鉄塔に出会う。同じところをぐるぐるまわっていたようだ。頭の片隅に、砂漠の中で野垂れ死になる自分の姿が一瞬かすめた。同時にガイドのウイグル人に怒りを覚えた。が、しょうがない。黙々と歩くのみだ。

4日目の昼過ぎから、きれいに植林されたポプラ並木が見え始めた。合流点(16団場)に近ずいてきたことを予感させる。夕方になると、ガイドのウイグル人がもう少しで合流点だという。彼のいうことは疑心暗鬼になりがちだが、期待もしてしまう。

突然、前方に補給隊の車の屋根らしいものが見えてた。それに



木陰で死んだように眠る

続いて佐藤や運転手等の姿が見え始めた。ついに合流点に到着したのだ。

アクス川と合流したヤルカンド川はタリム川と名を代え、そして再び水のある川となった。1日完全休息後、カヌー航行を再開。河幅約2 km、水かさは偵察時よりも1 m以上も高く、流速は時速約10 km。瀬も出現、高さ1 mほどの波もあった。次の補給地点の10団場までの62 kmを1日半、航行時間にすると7時間半で到着。日本の川では考えられないスピードだ。

10団場は中国側協力隊員王勇さんの生まれ故郷。そして、この町は新疆解放後に人民解放軍が開拓した町。名前はここに最初に入植した連隊名から来ている。農業を基盤とし、学校、郵便局、警察といった都市機能を備えている。住民のほとんどは他の省から来た漢民族。日本でいえば、明治時代の北海道での屯田兵開拓村のようなものだろうか。今まで通過してきた3団場や16団場も同じような町で、新疆にはこういった町が多く存在する。

ともあれ、我々は王勇さんの実家で2日間お世話になることになった。王家のもてなしぶりは熱烈だった。山羊、鶏、ウサギなどをつぶして最高の料理を御馳走してくれ、また新疆特産のスイカやハミウリなどを食べきれないほど出してくれた。今の日本では、ともすれば忘れがちな人の温もりを感じさせてくれる。

8月1日、10団場をあとにした我々は、次の補給地点である公安農場を目指した。このあたりも河幅1 km前後と広い。水量も相変わらず多い。しかしこうした状況下では、その日の野営地を捜すのは難しい。河幅が広いと肉眼では捜せないの、双眼鏡を使って捜す。そして岸に近ずいてよく見ると、地面がじめじめとぬれている場合が多く、河岸と水面との差はほとんどない。当然こんなところでは野営はできないので、また捜さなければならない。1時間以上も捜し回ったこと日もあった。また流速もかなり速く、5時間余り航行しただけで50 kmほども進んでしまう。スウェーデンの探検家、スウェン・ヘディンが100年ほど前に、「めくるめく速さで航行する」と記録したのも頷ける。

10団場を出発してから4日目の朝、公安農場に到着。予定よりも1日半早い。

補給地点では、必ず1日は休息することになっていたが、あまり疲労を感じないので翌日航行することに決定し、昼からその準備を行う。



王勇家とともに

ここから次の補給地点の七場三隊まで600km、20日の行程。地図の上では川の蛇行が激しく、また川が分流、合流を繰り返す「迷宮」と呼ばれている区間。87年に中国科学院がタリム川漂流（アクス川上流から）を行った時、本流の判定に非常に苦労したところで、我々にとってはワジの次に正念場となるところだ。

翌日8月5日、公安農場を出発。20日分の食糧と燃料を積んでいるので、パドルで水をかくのがいつもより重く感じられる。出発1時間後、右手に取水口が現れた。そのせいか、これより下流になると河幅が100~200mほどに狭くなった。しかし、上流ほどではないが流れは相変わらず速い。

公安農場を出て5日目、朝から小雨がパラつく。一時的に小雨が降ることは今までにも何度かあったが、この日は少し様子が違っていった。出発してから2時間後には本降りになり、気温は一向に上がりず吐く息が白い。全身ズブぬれになり、ブルブル震えながら航行を続ける。昼ごろ、突然河岸にテントらしき物が見えた。とりあえず、上陸すると20歳前後の漢民族3名がいた。後で聞いた話だが、彼らはこの辺りに自生しているロブ麻を採るために、もう1か月もテント生活をしているそうで、採ったそのロブ麻はクチャで売るそうだ。我々は彼らの好意に甘えて雨宿りをさせてもらうことにした。そして雨が一向に止まないの、結局ここで一泊することになった。その日の夕食は羊1頭。どこからともなくやってきたウイグル人2名がさばいてくれて、その後こま切れにした肉をゆがいて、塩をつけて食べた。料理としては単純極まりないが、こういった状況下では至高の料理だ。

翌朝、目が覚めるとものすごく濃い霧がたちこめていた。視界は10~20mほどで対岸は全く見えない。前日の雨の影響だろう。

お世話になった漢民族の青年達に別れを告げて、霧の中を出発。昼過ぎ、ようやく霧が晴れると、前方に仮設橋が見えてきた。王星さんがいうには、タリム油田開発のために造られた橋で、この橋を渡って南下するとタリム油田に通じるそうだ。河岸に目を向ければ、なるほどタンクローリーや四輪駆動車が止まっている。かつての秘境も開発の波が押し寄せているようだ。

出発してから10日目ほどになると、河幅が20~50mほどに狭くなってきた。流れもかなり緩やかにになって、時速6~7



霧の中をゆく

kmぐらいになる。これは砂漠に水がしみこんでいくのとは他に、ウイグル人達が用水路を造って、放牧地に水を流しているのも原因の一つだ。

この600km無補給区間中に、ウイグル人達の生活の様子を垣間み、考えさせられる機会がいくつかあった。

彼らが川を渡る時の交通手段は、上流では大きな渡し船だが、このあたりではカヌーである。丸太をくり抜いただけの簡単なもので、バランスをとるのが難しそうだが、彼らは立ったまま長い木のオールを漕いで、器用に川を渡っていく。このカヌーはおそらく何百年も前から全くモデルチェンジはしていないだろうと思われる。スウェン・ヘディンはこのカヌーに乗ってロプ・ノールを探検したのだ。それを目の前で見る自分できる自分を幸せに思った。また、ある昼時に現在地を聞きにウイグル人の家を訪ねに行った時、昼食としてウイグル人の主食のナンと羊の乳から作られたヨーグルトを御馳走になったことがあった。それは日本の感覚からいえば本当に粗末なものだった。さらに彼らの住居はといえどろ土を塗り固めたもので、着ている服はもう何か月も着続けているのかうす黒く汚れていた。しかし、彼らから貧困さゆえのみじめさは微塵も感じなかった。時間がゆっくりと経過する世界の中で暮らしている彼らは子供がそのまま大人になったような素直さ、素朴さを感じさせてくれる。反対に、分刻み、時には秒刻みの中で生活しなければならない我々日本人の方は、“豊かさ”ゆえのみじめさをにじみ出しているのではないか、と感じた。

8月17日、突然、川の流れに出くわす。これまでも川の蛇行が激しく、本流を見極めにくいことが何度かあったが、今度は本格的な迷宮に入り込んでしまったようだ。とりあえず、近くの砂丘に登って偵察を行う。南側の水路よりも北側の水路の方が、自然の川らしくしっかりした川筋のように見えたので、北側の水路に行くことにする。

川が分流したおかげで、ここまで河幅が10~30mほどあったのが、10~20mほどにもなり、所によれば10m以下のところもあった。流速も日本の川の下流地域と変わらないぐらいになる。

8月22日、地図から判断すると今日あたり七場三隊に到着するはず。しかし川下りを始めて2度目の本格的な雨により、しばらく近くにあった小屋で待機を余儀なくされる。昼前になって、



川を渡るウイグル族のカヌー



用水路のような川をゆく

ようやく雨が止んだので出発。昼ごろ以前分流した南側の水路と合流。川幅が20~30mほどに広がる。この時初めて、どちらの水路を行っても問題はなかったことに気づく。さらにあとで聞いた話によると南側の水路のがタリム川の本流だそうだ。

昼過ぎ、ようやく七場三隊に到着。この区間、補給隊に回っていた佐藤や運転手等と17日ぶりに出会う。自然と話がはずむ。我々航行隊もいろいろあったが、補給隊の方もいろいろあったようで、もう1人の運転手が走行中、用水路に車ごと転落してしまい、ウルムチに帰ってしまったといったことがあったようだ。

七場三隊で2日間完全休養して、8月25日、最終目的地の大西海子ダムへ向かう。今度の補給隊は運転手のみとして、我々日本人隊員は全員カヌーに乗り込む。

今まで川はほぼ真東に向かって流れていたが、七場三隊から下流になると、進路をやや南に変え東南東に向かって流れる。つまりタクラマカン砂漠の内側へと進んでいくのである。

出発してから2時間後、早速巨大な砂丘が遠くに見えはじめた。そして、昼ごろになるとそういった砂丘が河岸にまでせり出してきた。この砂漠と川というミスマッチなとりあわせの中でテントを張ることにする。夕方、全員で夕日を見に砂丘の頂きへ登る。キャーキャー言いながら子供のようにかけ上がる他の隊員を見ながら、ほほえましく思うと同時にうらやましく思う。日が没すると東の空に満月が浮かんできた。「月の砂漠」見物としゃれこむ。満月の光に照らされた砂丘群がボウと浮かび上がる様は、無機質な都会に住む我々を、この世のものとは思えない妖しくも幻想的な世界へ誘い込む。

8月29日、突然たった1人で補給隊を務める運転手の白さんが立っているのが見えた。これより下流20kmで大西海子ダムだが、水が極端に少なく、また完全なサポートができないので、ダム湖に入らない方がよいという。この川旅への「三下り半」に絶句してしまい、かつ拍子抜けしてしまった。

とはいえ、ここで終わりであることは仕方のないことなので、2か月間世話になったカヌーや装備を車に積み込んで、大西海子ダムへ向かう。

ダムに到着し、ダム湖をバックに記念撮影しながら、すごい探検を成し遂げたという達成感や充実感は感じなかった。いろいろ突拍子もない事（公安の尋問、中国側協力隊員の乗ったカヌーが転覆）



七場三隊にて



砂丘の間を流れるタリム川

もあったが、とにかくにも遠征が無事終了したという安堵の気持ちだけだった。

計画発案からもう3年と半年が経つ。今、ようやく全てが懐かしい思い出に変わろうとしている。

（山 田 勅 之）